一宮市博物館　　1994.10

博物館だより

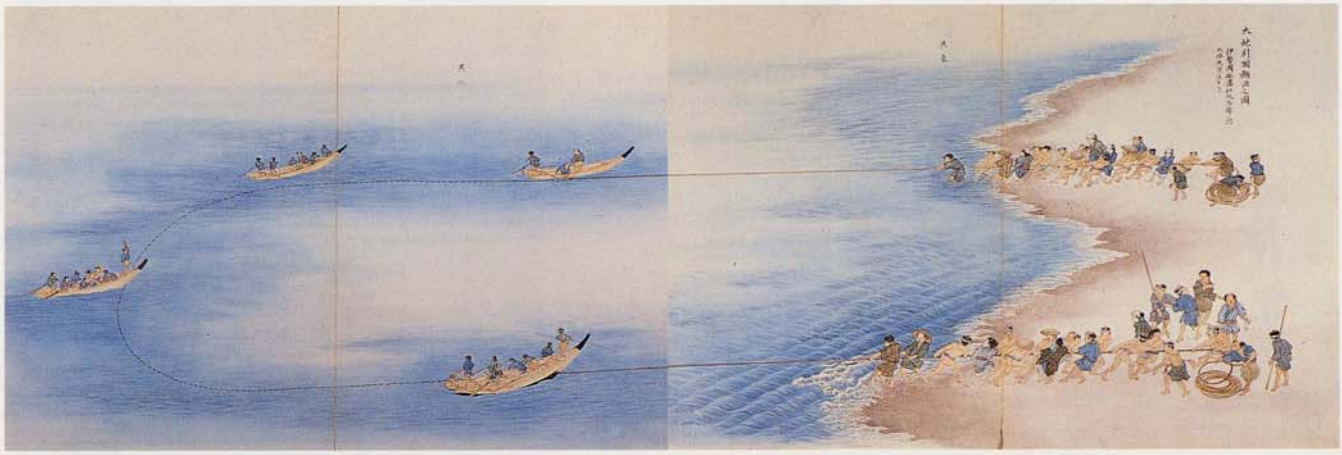
No. 18

企画展「漁の技術史－木曽川から伊勢湾へ－」

平成６年10月22日(土)～11月23日(水)

鹿角製固定銛
瓜郷遺跡出土
弥生時代中期～後期
豊橋市美術博物館蔵

重要有形民俗文化財
左：シャゴマ（南勢町田曽）　右：ツノ（志摩町和具）
(財)海の博物館蔵



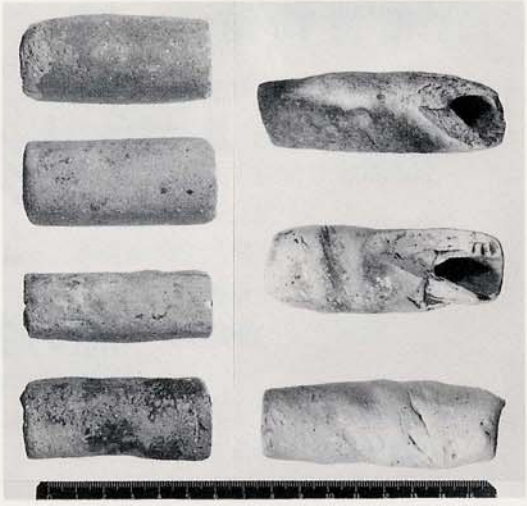
三重県指定有形民俗文化財
「大地引網鰯漁之図」『三重県水産図解』
明治16年　三重県教育委員会蔵
（写真提供：(財)海の博物館）

漁の技術史

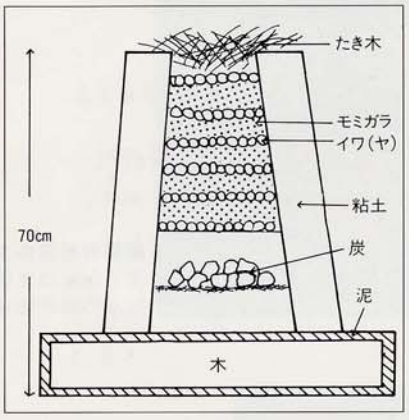
ー木曽川から伊勢湾へー

平城宮から出土した木簡には、奈良時代、伊勢湾から多くの塩や魚介類が運ばれたことが記されている。その種類は、サメ・クロダイ・スズキ・アワビ・ナマコ・カツオなど、私たちにも身近なものばかりである。また、「美濃国煮塩年魚」という荷札の文字は、木曽三川のある当地方の川に育てられたアユを示しており、古代にも名産であったものが、今に生きていると言えよう。伊勢湾には、木曽三川が流れ込み、湾を取り囲むように知多半島・志摩半島がある。従来、渥美半島などでは大がかりな地曳網漁が盛んであったり、刺網で十分魚が獲れるほど、湾内にもたくさん魚がいた。しかし、今では徐々にその伝統が崩れていき、海水浴場やリゾート地として有名になってしまったところもある。今回の企画展では、主に弥生時代から奈良・平安時代までの遺跡から出土した漁具資料を、民俗資料と比較しながら展示し、伊勢湾の漁業の伝統を探ってみようとするものである。そのことによって、川や海に生きてきた、そして生きている人々の息づかいを感じとっていただければと思うのである。

(田中禎子)

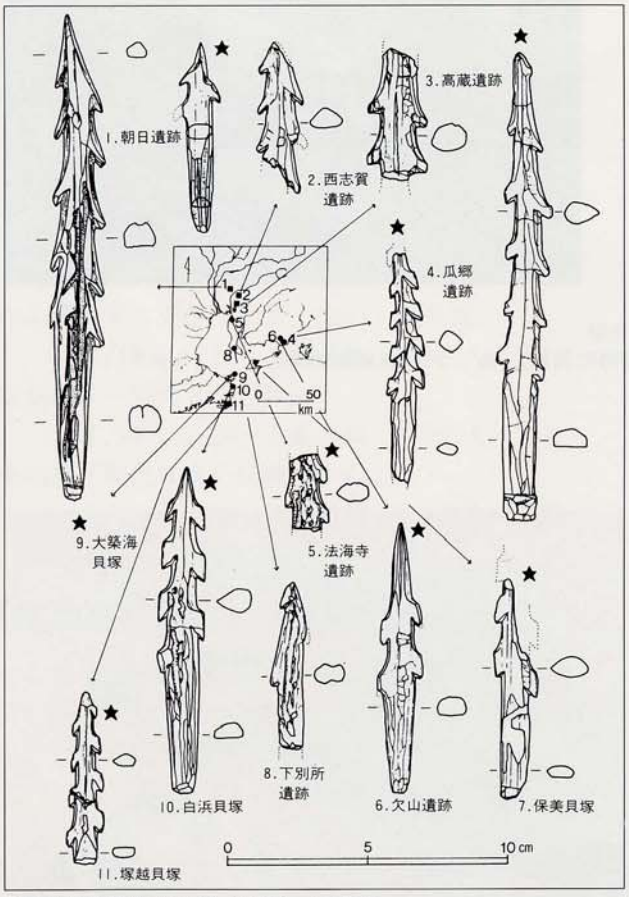


管状土錘　市道遺跡出土　8C中葉～10C
豊橋市美術博物館蔵



↑土錘をつくる
←土錘を焼くカマ
三重県長島町
清水清氏

漁網につけるイワ(ヤ)は、漁師が自分で作った。土は近くの山で採集し、土管などを利用してカマを作って焼いた。一回に約1000個焼き、1年に2回ほど焼いた。このほか、土錘をワラで包んで焼く方法(浜名湖)、地面に穴を掘って野焼きする方法(鳥羽地方)があるそうである。



「翼状の逆刺をもつ銛（★印）」の分布

翼のような形をした逆刺を作りだした固定銛が、志摩半島・知多半島・渥美半島・三河湾奥部から出土し、伊勢湾奥部の西志賀遺跡・朝日遺跡・高蔵遺跡出土のものとは別の地域性を展開させている。

鹿角製固定銛
朝日遺跡出土
弥生時代中期
愛知県清洲
貝殻山貝塚資料館蔵

研究ノート

「地名と土地利用」考 －千秋町芝原の例から－

1、概観

一宮市の東部千秋町内に位置する芝原地区は、青木川右岸に位置し、木曽川の形成した犬山扇状地の末端に位置する。扇状地から沖積地へと移り変わるいわゆる傾斜変換地帯であり、青木川の形成した自然堤防と氾濫原もみられる。

土地利用形態は、そのほとんどが畑、林、集落の立地する標高14.2m前後の微高地であり、面積的にはわずかであるが比高マイナス１m前後の水田からなる、農村地帯と言ってよいであろう（図１）。

図１　地形図（1/25,000）

2、地名

江戸時代後期から明治時代にかけての地名を知る資料として、「芝原村絵図」(天保12(1841)年に描かれたもので、以下「天保村絵図」と呼ぶ)に記載された字名がある(図２)。

それ以外に、芝原には

「畝坪書抜帳」(明治６年(1873)、以下「書抜帳」と呼ぶ。)

「田地内券調帳」(明治６年(1873)、以下「調帳」と呼ぶ。)

「土地台帳」(明治10年(1877)、以下「台帳」と呼ぶ。)

「地籍図」(明治10年(1877))

の文書が後藤繁満氏宅に残されており、後藤弘通氏の努力により、それらが書写されている。

以下それらの文書に残る字名、筆名を抽出する。なお、文章中「天保村絵図」の字名は〈○○〉で、「書抜帳」「調帳」に記載される筆名は[○○]で、「台帳」に記載される現在の字名は｛○○｝で表記した。

(1)「天保村絵図」に記載された字名

〈北浦〉、〈北裏〉、〈東出〉、〈五十歩〉、〈如来道〉、〈上ノ山〉、〈諏訪野〉、〈下山〉、〈馬出〉、〈高畑〉、〈古井戸〉

(2)「書抜帳」に記載された筆名

図２　天保村絵図に記載された字名
（天保村絵図より作成）

〈北浦〉・〈北裏〉＝｛郷浦｝

[北浦][郷浦][嘉平治浦][合浦][与平治浦][郷浦平左浦][喜左北浦][兵エ門郷浦]

〈東出〉・〈五十歩〉＝｛五十分｝

[おみ畑][願永寺浦][東出][甚左エ門東出][郷東出][郷前][合前][鳥居先][長安道]

〈如来道〉＝｛狐塚｝

[郷前][宮前][天王][天王下][天王西][如来堂]

〈上ノ山〉＝｛上ノ山｝

[棒の山][棒山][ぼの山][上の山]

〈諏訪野〉・〈下山〉＝｛下山｝

[スワノ][中道][中道南][下山][中道出口][田の尻][はか前][山前][郷前][合前][山出前]

〈馬出〉・〈高畑〉＝｛中道｝

[八幡前][馬出し][高畑]　[中道][中道北][西出][山浦]

〈古井戸〉＝｛古井戸｝

[古井戸][古井戸川南]

「書抜帳」に記載された筆名は、各筆の所有者が、その所有する田畑を呼んだ名称であり、その呼称で概ね村人がその地点を思い浮かべることができたものであると考えられる。なお、屋敷地のあった｛石原｝は記載されない。

(3)「調帳」に記載された筆名

［中道］、［八幡前］、［馬出し］、［西手］、［山くろ］、［をます］、［古井戸］、［鳥居前］、［東出］、［北浦］、［スハノ］、［ぼの山］、［棒山］、［郷前東］、［西出］、［浦畑］、［中道南］、［下山］、［おみ畑］

「調帳」に記載された筆名は、庄屋がまとめ集約したものであり、記載する筆名も「書抜帳」に比して減少する。

(4)「台帳」に記載された字名

｛上ノ山｝（地番１～51）　｛下山｝（地番52～155）　｛中道｝（地番156～235）
｛古井戸｝（地番236～274）　｛石原｝（地番275～342）　｛郷浦｝（地番343～378）
｛五十分｝（地番379～433）　｛狐塚｝（地番434～451）

この「台帳」では、１から451まで地番を各字ごとに割り当てており、現在まで継続するものである。

以上列記した字名、筆名の変遷をまとめると表１のようになる。また、図３は、｛狐塚｝｛上ノ山｝地区周辺の筆図に、「書抜帳」記載の筆名を抽出記入したものである。

ここで興味をひかれるのが｛狐塚｝という字名である。「天保村絵図」では〈如来道〉と呼ばれ、「書抜帳」、「調帳」にも記載されていない呼称がなぜ突然登場するのか。かってこのあたりに塚状の高まりが存在した可能性が高い。

ごじぶん（〈五十歩〉｛五十分｝）という字名も、「書抜帳」、「調帳」には記載されていない呼称であるが、字名としては通用しているようである。御寺分の転化であろうか。

また、｛上ノ山｝地区では、所有者によって各筆の呼称が相違したことが判る。

３、地形と土地利用（図４参照）

｛石原｝地区は、生田神社を中心とした屋敷地であり、集落が継続的に営まれてきた。また「山」と呼ばれる林や藪の立地する場所でもある。｛石原｝という字名は、石原山と呼ばれた微高地周辺であることに由来し、表土が薄く地表直下に扇状地特有の礫層があり、石が出てくるところという意味であろうか。

｛郷浦｝地区は、文字どおり集落の北側であり、裏である。すべての筆名がその意を表している。西半は畑、東半は水田が分布する。

｛五十分｝地区は、畑が主体的に分布し、中央部に水田が分布する。郷の東にあることから［東出］［郷前］の筆名が残る。［願永寺浦］は加納馬場村にある願永寺の裏の意である。また［長安道］は、南を走り石仏村長安へ抜ける道を長安道と呼称したことに由来する。ちなみに石仏村には寛文２年銘の鰐口を所蔵する長安寺薬師が所在する。［おみ畑］の由来は不明と言わざるをえない。

｛狐塚｝地区は、水田と畑がほぼ半分ずつを占める。「書抜帳」で［如来堂］と呼ばれるのは、わずか１筆であるが、それを字名として採用している。｛狐塚｝という字名は、前述のように塚状の高まりの存在を暗示する。また［天王］［天王下］［天王西］という筆名は、東接する石仏村の天王社に由来する。

｛古井戸｝地区は、水路沿いに小面積の水田が分布する。農作業の時に中世の井戸でも掘り出されたことでもあるのであろうか。

｛中道｝地区は、畑が主体的に分布する区域であり、［馬出し］［高畑］の筆名がのこり、道路の周辺を［中道］［中

表１　字名の変遷表

「芝原村絵図」（天保12年(1841)）記載の字名	「畝坪書抜帳」（明治６年(1873)）記載の筆名	「田地内券調帳」（明治６年(1873)）記載の筆名	「土地台帳」（明治10年(1877)）記載の字名
北浦 北裏	北浦　郷浦 嘉平治浦 合浦 与平治浦 郷浦平左浦 喜左北浦 兵エ門郷浦	浦畑 北浦	郷浦
五十歩 東出	東出　願永寺浦 甚左エ門東出 郷東出　郷前 合前　鳥居先 長安道　おみ畑	鳥居前 郷前東 おみ畑	五十分
如来道	郷前　宮前 天王　天王下 天王西　如来堂		狐塚
上ノ山	棒の山　棒山 ぼの山　上の山	ぼの山　棒山	上ノ山
諏訪野 下山	スワノ　中道 中道南　下山 中道出口　山前 はか前　田の尻 郷前　合前 山出前	スハノ　下山 中道南	下山
馬出 高畑	八幡前　馬出し 高畑　中道 中道北　西出 山浦	西手　八幡前 山くろ　西出 をます　中道 馬出し	中道
古井戸	古井戸 古井戸川南	古井戸	古井戸
			石原

図3　字狐塚、字上ノ山の筆名
（明治10年地籍図に、「畝坪書抜帳」に記載された筆名を加筆して作成）

道北]と呼ぶ。{中道}という字名は、従来{中道}と{下山}の境界である道路の両側を示していたものが、明治10年の段階で道路北側の字名として用いられるようになったものであろう。また[八幡前]という筆名は、南隣する町屋村の八幡社に由来する。

{下山}地区は、中央に小面積の水田が所在し、周辺に畑が分布する。[田の尻][スワノ]等の筆名がみられ、道路に近いところを[中道][中道南][中道出口]などと呼ぶ。

{上ノ山}地区は、畑が主体的に分布する。筆名は[棒の山][棒山][ぼの山][上の山]が混在して分布する。各人によって呼称が相違したようである。

ところで、この芝原地区においては考古学的調査はなされていないが、後藤氏によって遺物採集がなされており、{古井戸}地区では古式土師器、須恵器、灰釉陶器類が、{中道}地区では古式土師器、山茶碗が、{五十分}地区では須恵器、山茶碗が、{上ノ山}地区では弥生時代後期の土器、山茶碗が採集されている。

弥生時代後期以降、中世に至るまで微高地部分を中心に人々が生活していたと考えられ、近世以降の段階で{石原}地区に集落が形成されたと考えられる。

4、小結

以上述べてきたように、地名は土地利用、あるいはその場所の立地形態にあわせてつけられ、その中の一つの呼称が小字名として残るようである。

そして、特徴的な筆名あるいは一部の筆名でその字を代表させてしまうなど、作成者（記載者）の主観がかなり入り込んだものであり、かなりファジーな面が多かったものと思われる。例えば、当時の庄屋をつとめていた人の所有地の筆名を字名としてしまうことなどがあったのではないかとも思われるのである。

さらに言えば、同じ場所でも別の呼称を持つ場合もあり、また同じような地点に位置するところを、ある人はこう呼び、また別の人は違う呼び方をするといったようなことがあったものと思われる。

ひとつの村の事例であるが、古文書が残され、それをもとに当時の地名が復原でき、その変遷をたどることができる。このことは、他の村についても同様な操作が可能なものと考えられる。今一度こうした古文書の所在を調査し、地名を見直してみたいものである。

この小考は、千秋町芝原在住の、後藤繁満、後藤弘通両氏の調査成果による部分が大きい。また図面の作成については、石田容子氏にご協力いただいた。記して感謝の意を表する次第である。

（土本　典生）

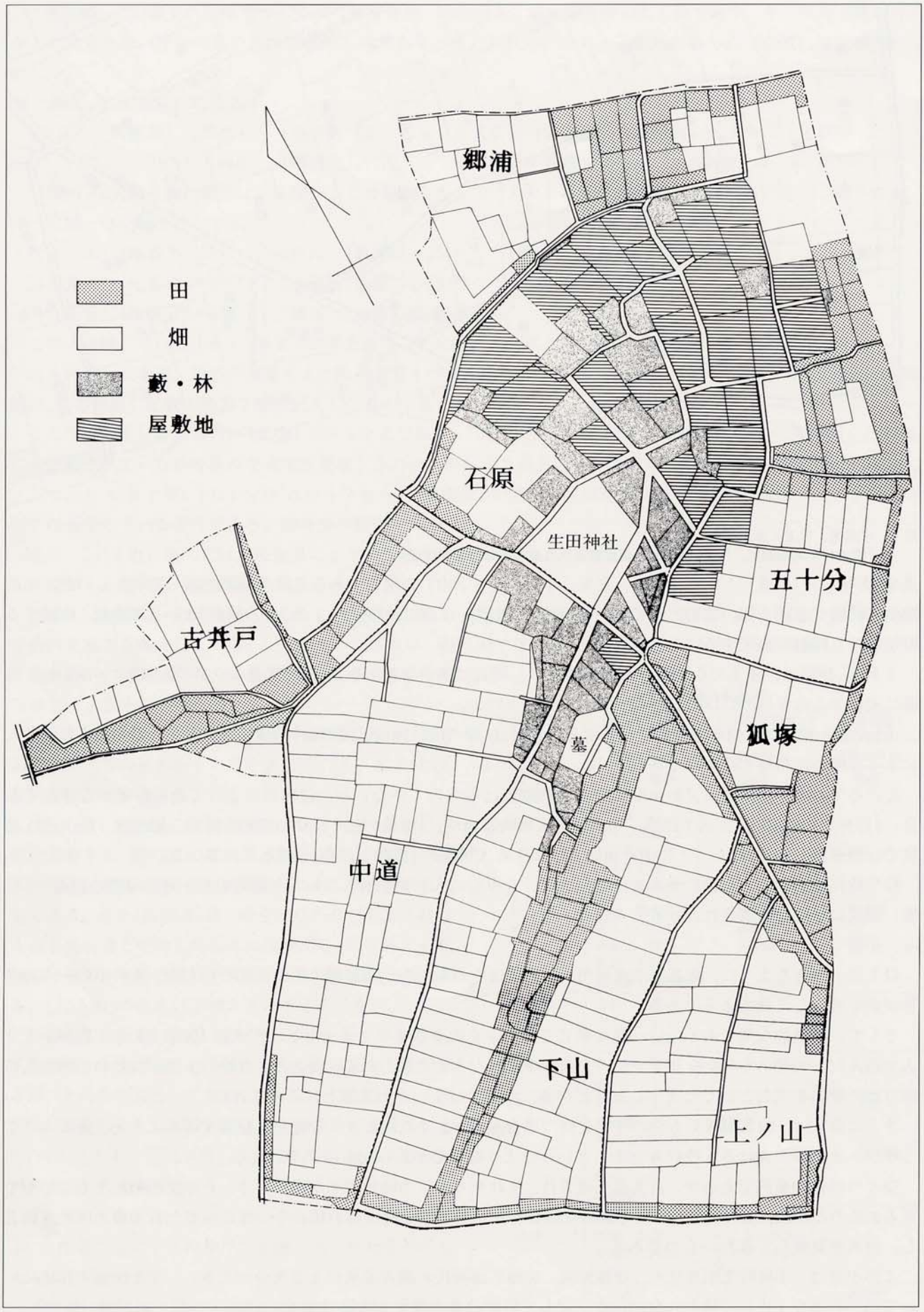


図4　土地利用区分図
（明治10年地籍図に、「畝坪書抜帳」に記載された土地利用区分で作成）

民俗探訪（4）　最近の調査から

一宮市内で仕事を続けている鍛冶屋は、現在２件になってしまった。ここ数年、いつのまにか数が減り、町から鍛冶屋がなくなる日がくるのかと不安になる。一宮周辺で仕事を続けている鍛冶屋には、稲沢市鍛冶富（丹羽富三氏）、清洲町鍛冶重（葛山秀雄氏）、犬山市鍛冶屋善六（宮島四郎氏）、岩倉市土屋末種氏、春日井市鍛冶銀（小林光義氏）、春日井市竹内薫氏などがあり、このほかにも津島市、対岸の岐阜県各務原市などにもある。

市内で昨年なくなってしまった鍛冶屋に鍛冶銀（河邑製作所）がある。一宮市の北部、木曽川からすぐのところ浅井町尾関にあった、２代続いた鍛冶屋である。この名前は、備中鍬の形態の地域性を調査している際、浅井町・隣の江南市などの農家の方々からよく聞いた。そのとき、伺っていればお話を聞くことができたが、昨年亡くなってしまったのである。岐阜県加茂郡白川町で生まれた初代河邑銀次郎氏（M34.6.22生）が関の刀鍛冶で修行し、この地に店を開いた。それを２代目良康氏が引き継いだ。作業場に入ると、２つのホドがあり、２人で仕事をされていた様子が目に浮かぶようであった。すでに取り外されていた、ホドのそばの柱に打ちつけられていた縁起物の痕跡が、何十年という歳月を物語っていた。今回、その作業場の記録としてスケッチをしたのでここに紹介し、最近お話をうかがった鍛冶富丹羽氏の作業の様子もあわせて掲載することにした。詳細は後日報告するつもりである。

（田中禎子・スケッチ：石田容子）

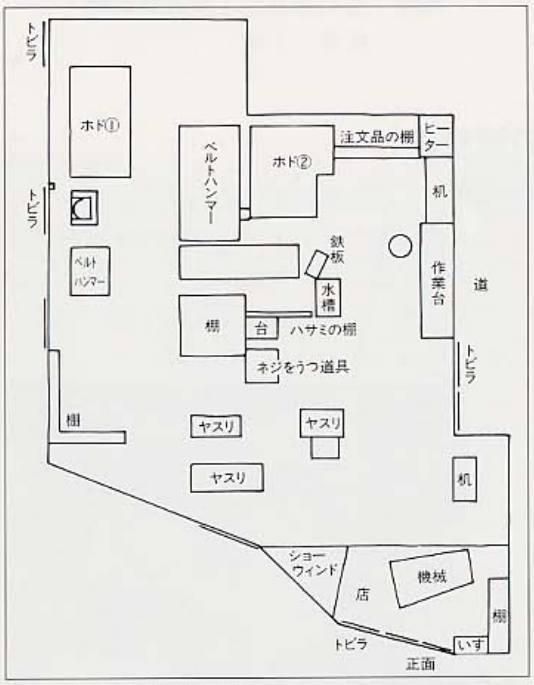


図１　作業場全体の配置

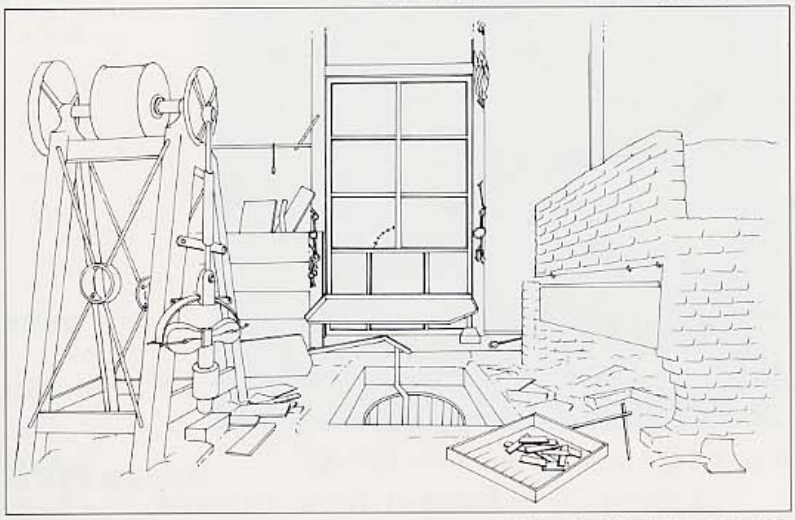


図２　初代銀次郎氏のホド①

写真１　備中鍬をつくる　鍛冶富　丹羽富三氏

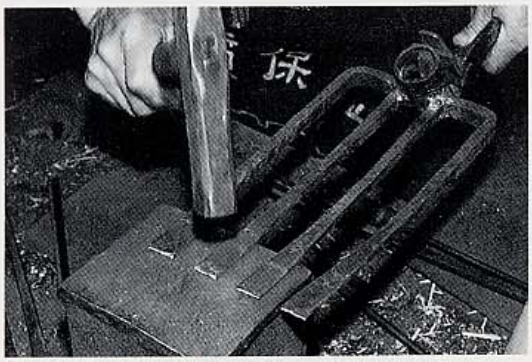


写真２　稲沢市周辺の備中鍬　鍛冶富　丹羽富三氏

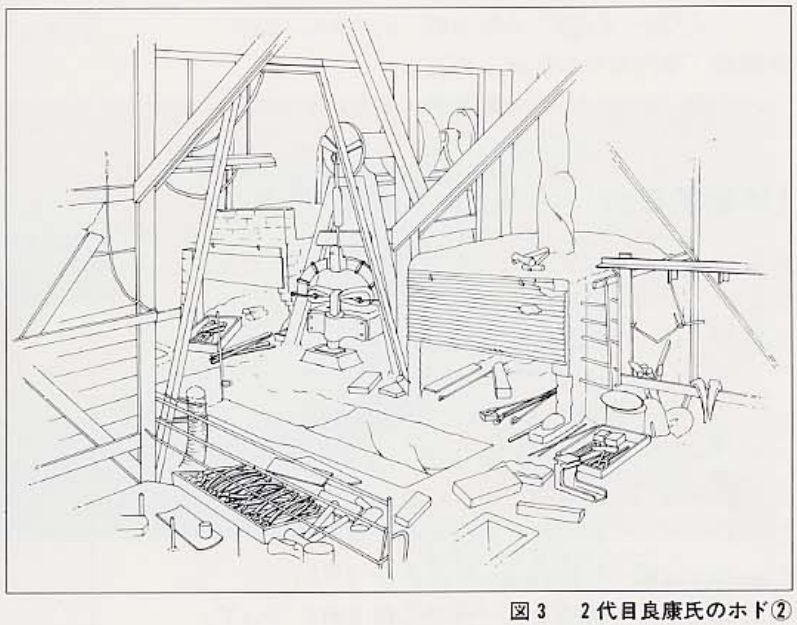
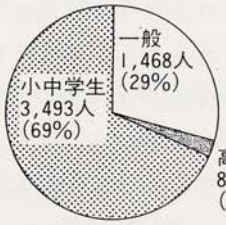


図３　２代目良康氏のホド②

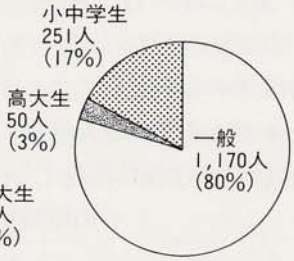
【ご来館有難うございました(6.1.5～8.31)】

邦楽グループＲＥＮ・牡丹稲沢句会・ユールハウス・愛知県児童館連絡協議会・尾張草文会・フォーラム21少年少女合唱団・邦楽グループＮ３・一宮市立大和南小学校・一宮市立富士小学校・適応学級サンシャイン138・一宮市立末広小学校・一宮女子短期大学・モスバガー中京西支部・南高井子供会・一宮市立浅井小学校・稲沢市立千代田小学校・一宮市立大和西小学校・稲翠会・一宮市施設めぐり・稲沢市文化財愛護少年団・名古屋市博物館小学生歴史教室・一宮市社会福祉協議会

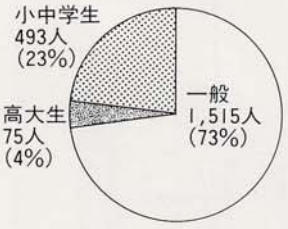
【展覧会開催中の入場者数】



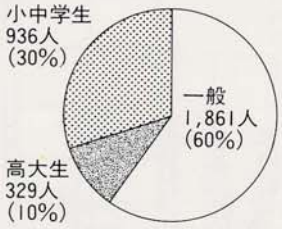
「くらしの道具 ー今と昔ー」



「手つむぎ染め織り展」



「一宮の名宝(Ⅳ)」



「現代日本の伝統もめん」

収蔵品展「くらしの道具－今と昔－」
　　1/11～2/27　入館者数　5,047人／41日
作品展「第５回手つむぎ・染め・織り展」
　　3/13～4/3　入館者数　1,471人／17日
特別展「一宮の名宝（Ⅳ）」
　　4/29～5/29　入館者数　2,083人／25日
企画展「現代日本の伝統もめん」
　　7/20～8/31　入館者数　3,126人／37日

【博物館日誌(抄)(6.1.5～8.31)】

6.1.11～2.27　収蔵品展「くらしの道具－今と昔－」
6.3.5・6・20　博物館講座「土器をつくろう」
6.3.12・19　博物館映画劇場
　　「伊作の太鼓踊り」
　　「海に翔び森にさえずる」
6.3.13～4.3　「第５回手つむぎ・染め・織り展」
6.3.13・27　みんなで楽しむ糸づくり大会
6.3.27　巡回民俗芸能大会「島文楽」
6.4.29～5.29　特別展「一宮の名宝（Ⅳ）」
6.5.15　講演会「一宮の仏教美術について」
　　講師　一宮市文化財保護審議会委員
　　長谷川公茂氏
6.7.20～8.31　企画展「現代日本の伝統もめん」
6.7.24　講演会「木綿－近代を紡いだ衣料－」
　　講師　朝日大学経営学部助教授
　　根岸秀行氏
6.7.30・31　博物館講座「編布をつくろう」
6.8.6・7　博物館映画劇場「イタズ」
6.8.7・14・28　親子で楽しむ糸づくり大会
6.8.23～27　博物館実習
6.8.21　講演会「再現した美濃・尾張のもめん」
　　講師　愛知県立起工業高校講師
　　佐貫　尹氏

【最近の博物館】

☆名古屋市博物館小学生歴史教室のお手伝い!!

昨年度もご来館いただいた名古屋市博物館の歴史教室が、今年も当館で弥生機に挑戦しました。先生方が悪戦苦闘して糸を機にかける準備をし、子供たちがいちばん楽しい織りの作業を体験しました。

名古屋市博物館提供

☆博物館講座「編布をつくろう」が２回目の挑戦!!

平成４年度には参加者が集まらなかったこの講座も、今年は大好評。文化祭で、編布を着て竪穴住居に入りたい？という一宮高校の生徒もいて、頑張りました。その後、衣服を仕上げて、博物館にプレゼントしてくれました。

一宮市博物館だより　第18号
平成６年10月22日
編集・発行　一宮市博物館
〒491　一宮市大和町妙興寺2390番地
TEL　0586-46-3215
FAX　0586-46-3216